

南薰西遺跡

—第 10 次発掘調査報告—



令和 3 (2021) 年 2 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、筑後地方における中心部として発展を遂げてきました。また、それに伴い市内各所に数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、久留米市街地の東部にあたる南薫西町で実施しました。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の方をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和3年2月28日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例言

1. 本書は共同住宅建設に先立ち、九州ダンボール株式会社代表取締役山村曜子氏の委託を受けて実施した、南薫西遺跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の長谷川桃子が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、調査担当者と中村麻衣、山口誠也が行い、浄書は長谷川が行った。
4. 遺物の実測と浄書は長谷川が行った。
5. 遺構写真はCanon EOS6D Mark IIを用いて長谷川が撮影した。遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、PENTAX K-1 IIを用いて長谷川が撮影した。調査区全体の空中写真は、有限会社空中写真企画がドローンを用いて撮影した。
6. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は国土調査法第II座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
7. 遺構表記の略記号は、SD-溝、SP-ピットを意味する。
8. 実測図と観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
9. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10. 本調査の略記号はNKN-10、調査番号は201910である。
11. 本文の執筆と編集は長谷川が行った。
12. 越州窯系青磁の分類は、太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集による。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	5
IV. 総括	9

表紙写真：調査区全景（南上空から）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和元年6月20日、土地所有者である九州ダンボール株式会社代表取締役山村曜子氏から久留米市南薫西町字祇園田1939番1、1940番4、1940番8、1943番4、1945番1、1946番3における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である南薫西遺跡の範囲内にあたる。同年7月20日の試掘調査でも高い密度の遺構を確認したため、建物の建設にあたって遺跡の破壊が免れないと考えられた。そのため、発掘調査が必要である旨を回答した。同年8月19日に「発掘調査の依頼」が提出されたため、同年9月25日に久留米市長と土地所有者は南薫西遺跡第10次調査の委託契約と協定書を取り交わした。

現地調査期間は令和元年10月1日から同年12月20日まで行った。遺物整理と報告書作成は協定書に基づいた委託契約を取り交わし、令和3年2月28日まで行った。調査面積は408㎡である。

2. 調査及び報告書作成にかかる体制

調査委託者：九州ダンボール株式会社 代表取締役 山村 曜子

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：大津 秀明（令和元年度）

井上 謙介（令和2年度）

調査総括：久留米市 市民文化部 部長：宮原 義治（令和元年度）

竹村 政高（令和2年度）

文化芸術担当部長：竹村 政高（令和元年度）

次長：西村 信二

文化財保護課 課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守 丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：塚本 映子（令和元年度） 小澤 太郎

調査担当：長谷川桃子

整理担当：米澤美詠子 今村 理恵 宮崎 彩香

発掘調査臨時職員

青木佐智子、石橋 康子、鐘江 清、高尾 春代、田中 樹子、中村 麻衣、藤木 幸子、丸山 幸、福田 猛、久保田英嗣、進上 裕永、山口 誠也、荒巻 隆憲、大坪 進國武 三歳、堀江 俊文、柳 鈴子、山田 治代、案納 哲夫、横山 満浩

発掘調査整理臨時職員

溝上 直子（令和元年度）

大津山恵津子（令和2年度会計年度任用職員）

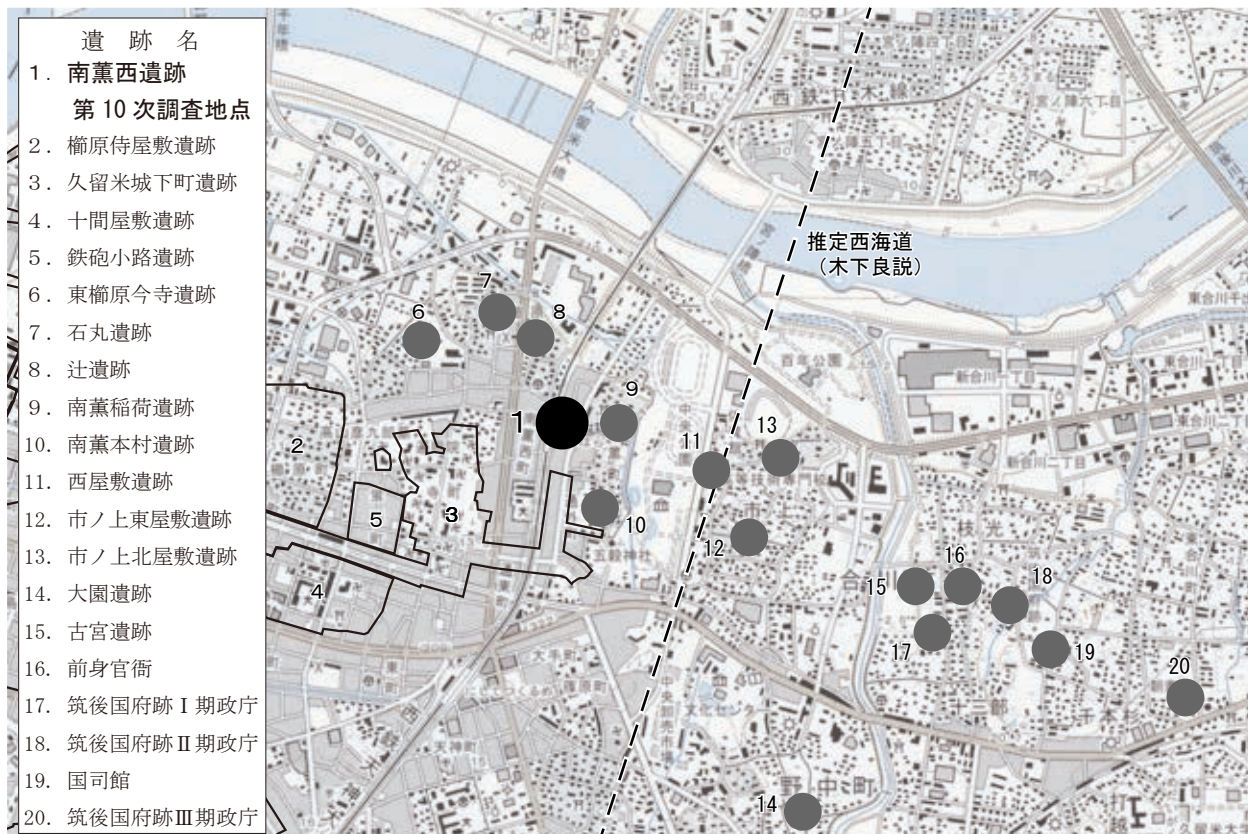
3. 調査の目的と経過

今回の調査は、周辺で確認されている古代の遺構の広がりを確認することを目的とした。令和元年10月1日から7日まで重機で表土剥ぎを行う。表土剥ぎと並行し、遺構の検出、平板測量を行う。その後、順次遺構掘削、測量、写真撮影を実施した。12月14日に全景写真をドローンで撮影した。同月20日まで補足の調査や撤収作業を行い、現地での作業を終了した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水系メッシュ法（1/10）で記録した。

II. 位置と環境

調査地一帯は、筑後川中流域左岸に形成された低台地が広がり、小河川によって開析された谷は台地の周辺に湿地帯を形成している。本遺跡は筑後川に向かって南から北へ延びる低台地の中央部に位置しており、標高約13mを測る。

筑後川に面した台地の北側縁辺部には多くの弥生時代の遺跡がみられる。調査地の北西側には前期末～後期の集落と墓域で構成される東櫛原今寺遺跡や前期末～中期中葉の二列埋葬の甕棺墓がある石丸遺跡が、その東側には前期～後期の集落と墓域が確認された辻遺跡が所在する。北東側には前期後半～中期の墓地群である南薫稻荷遺跡、南東側には後期初頭の竪穴住居が確認された南薫本村遺跡がある。調査地から谷を挟んだ東側の台地にも、中期以前の環状土坑列や板付Ⅱ式段階の壺棺墓が検出された市ノ上北屋敷遺跡や墓地群が確認された西屋敷遺跡がある。さらに東の台地に所



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

在する古宮遺跡からは終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居が密集して発見されている。

歴史時代に入ると、調査地から東へ1.5 kmの台地上に7世紀後半、筑後国府の前身となる官衙が設置された。7世紀末に筑後国が成立し、前身官衙の付近に南北170 m、東西推定160 mの築地塀で区画されたⅠ期政庁が営まれる。8世紀中頃にⅠ政庁から東へ約200 mの位置にⅡ期政庁が移転し、9世紀前半に瓦葺きとなり10世紀中頃まで存続する。

本遺跡と谷を挟んだ東側の台地には西海道が通ると推定されている（木下良説）。この台地の西縁辺部に所在する西屋敷遺跡は、7世紀後半から8世紀前半の土坑群が検出されている。また、本遺跡から東へ300 mの南薫本村遺跡では、奈良時代の土坑が検出されている。大園遺跡からは、9世紀代の掘立柱建物や緑釉陶器、越州窯系青磁などが出土し、公的施設や居宅の存在が示唆される。

本遺跡が所在する一帯は、『和名抄』によれば筑後国御井郡節原郷に比定されている。第6次調査では飛鳥時代から平安時代の土坑、竪穴建物、掘立柱建物が、第8次調査では桁行6間以上の建物が2棟検出されている。また、墨書土器や刻書土器の出土も多く、第6次調査で22点、第8次調査で116点が確認されている。記述の内容は、第6次調査では「大領」「領」「茅原」などが、第8次調査では「宅代」などがある。緑釉陶器や輸入陶磁器の出土なども鑑みると、一般集落との特異性が指摘でき、官衙との関連や節原郷の中心となる集落と想定されている。

中世では石丸遺跡で大型銭（崇寧重寶）や大量の輸入陶磁器が出土し、辻遺跡では区画溝が検出されている。近世になると久留米城下町が整備されるが、調査地はその北側の櫛原村に含まれる。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

Y=-44,290.000

Y=-44,280.000

Y=-44,270.000



X=35,460.000

X=35,450.000

X=35,440.000

X=35,430.000

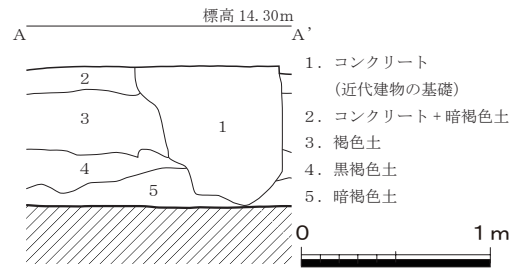


第3図 遺構配置図 (1/150)

III. 調査の記録

1. 基本層序

調査地の層序は、調査区西壁で、コンクリートと暗褐色土（厚さ 10cm）、褐色土（厚さ 30cm）、黒褐色土（厚さ 15cm）、暗褐色土（厚さ 15cm）の順で褐色土の地山に到達する。また、近代の建物の基礎（70cm）が地中に埋まっている個所があった。地形は東側に向かって傾斜しており、遺構面まで最深 80cm で到達した。



第 4 図 調査区西壁土層図 (1/40)

2. 検出遺構

今回の調査では、溝 7 条と多数のピットを検出した。ピットは 70 ～ 80 cm と非常に深かった。以下、主要な遺構について記述する。

溝

SD 20 (第 5・6 図)

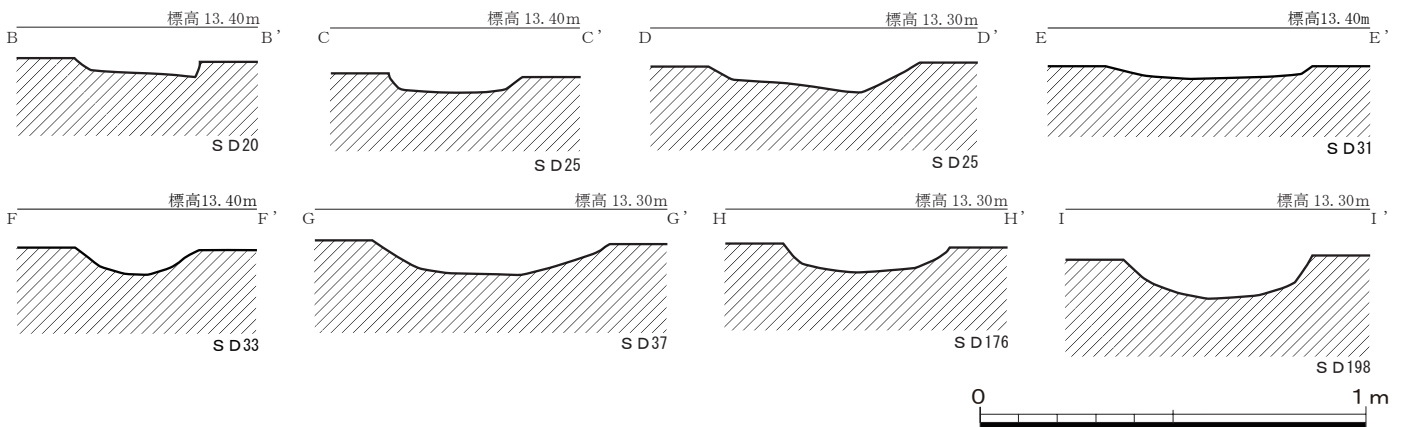
調査区西部で検出された溝で、北端は調査区外に延びる。長さ 5.2 m、上端幅 32cm、深さ 3.0cm を測る。断面は逆台形を呈する。土師器の甕や坏の細片が出土している。SD 25 とほぼ平行関係にあり、SD 20 と SD 25 の間に極端にピットの数が少ないことから、SD 20 と SD 25 を側溝とする道路遺構の可能性が考えられた。ただし、路面や地業に伴う硬化面や波板状圧痕などの道路遺構を示す要素は検出されていない。なお、SD 20 と SD 25 の芯々間の幅は 2.5 m である。

SD 25 (第 5・6・10 図)

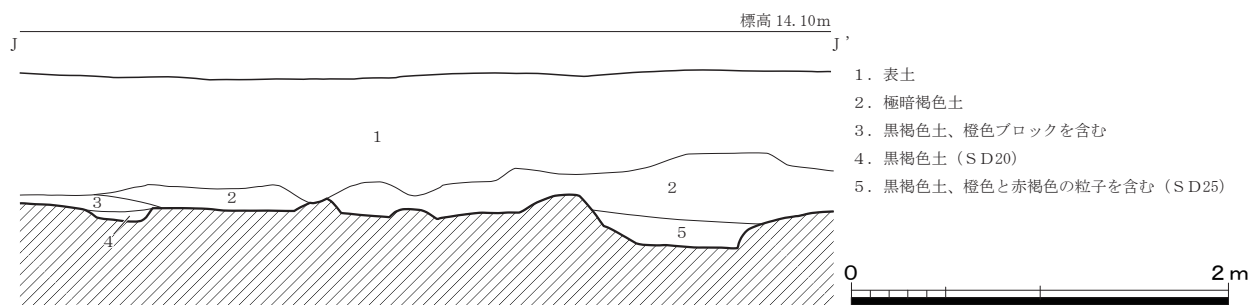
調査区の中央を南北に走る溝で、南半部は東側へ湾曲する。南北端は調査区外にのびる。長さ 28 m、上端幅 54cm、深さ 7.7cm を測る。断面は逆台形を呈する。SD 20 と平行関係にある。須恵器甕の胴部や土師器の埴の底部の他、黒色土器 A 類の口縁の細片が出土している。

SD 31 (第 5 図)

調査区西部で検出された南北溝である。長さ 3.3 m、上端幅 53 cm、深さ 3.0 cm を測る。断面は逆台形を呈する。SD 33 と走行方位をほぼ同じくする。また、SD 37 と平行関係にある。須恵器



第 5 図 SD 20・25・31・33・37・176・198断面図 (1/20)



第6図 調査区北壁土層図 (1/40)

甕の細片が出土している。

SD 33 (第5・11図)

調査区中央を走行する溝で、長さ7.0m、上端幅1.0m、深さ6.0cmを測る。断面はU字形を呈する。SD 176・SD 198が延長部分にあたりとみられる。青磁碗の口縁部の他、土師器の細片が出土している。検出時はSD 25に切られると考えていたが、出土した青磁碗が中世のものであれば、先後関係は逆転する。しかし、SD 25・SD 33ともに遺物量が少なく、青磁碗も細片であるため、断定できない。

SD 37 (第5図)

長さ7.0m、上端幅61cm、深さ9.1cmを測る。断面はU字形を呈する。越州窯系青磁皿、黒色土器A・B類や土師器坏、須恵器壺の細片が出土した。

SD 176 (第5図)

長さ4.4m、上端幅43cm、深さ7.4cmを測る。断面はU字形を呈する。SD 25・198の延長線上を走る。土師器の把手や黒色土器B類の細片が出土した。

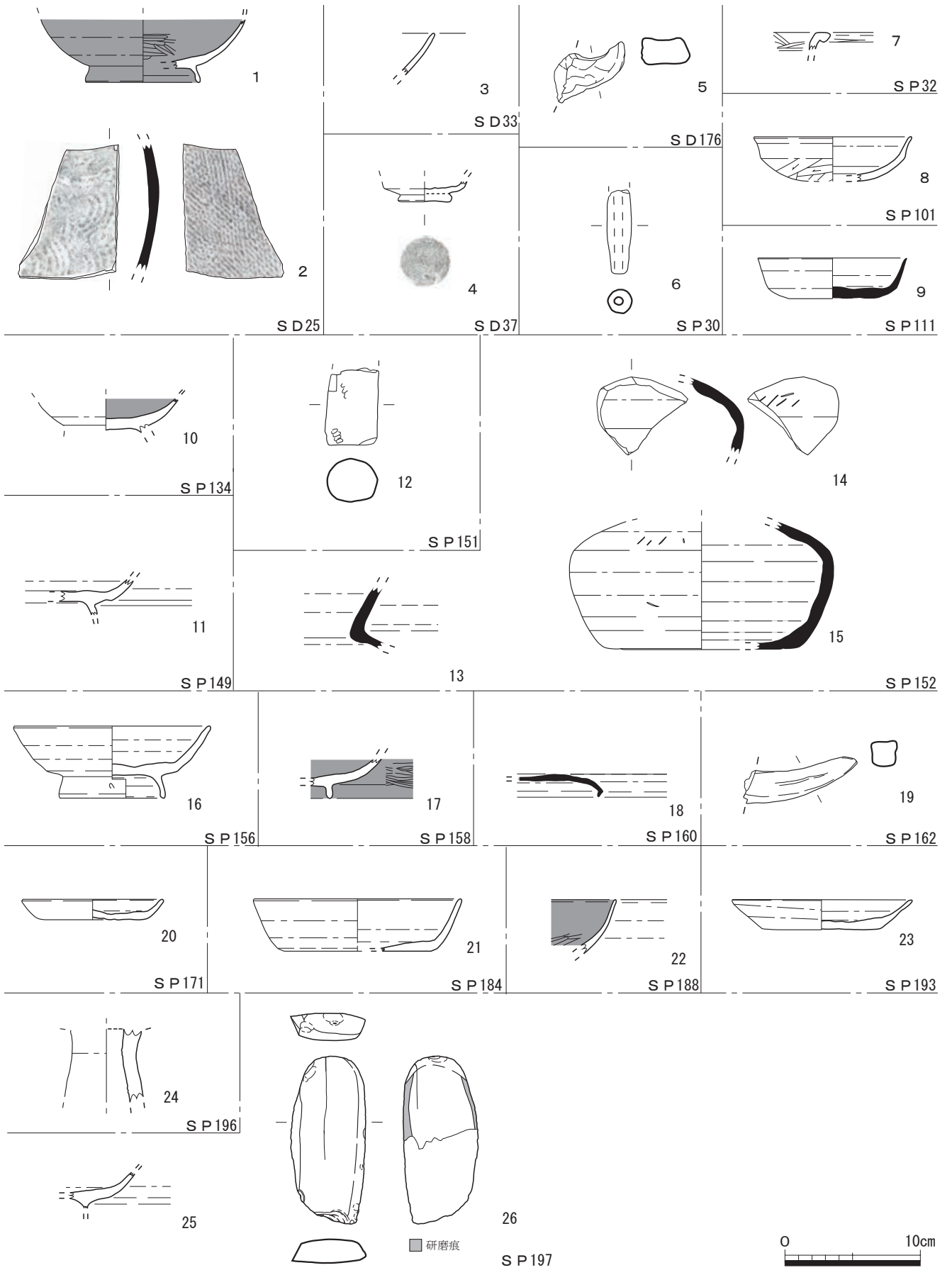
SD 198 (第5図)

長さ2.8m、上端幅48cm、深さ10cmを測る。断面はU字形を呈する。SD 25の延長線上を走り、南側はSD 176方面へと続く。遺物は出土していない。

3. 出土遺物 (第7・13・14図)

今回の調査では、パンコンテナー1箱分の土師器や須恵器などが出土した。大半が細片で、図化できるものは27点しかない。

1・2はSD 25から出土した。1は、黒色土器B類の壺である。内面はミガキがみられるが、黒色に発色していない。2は須恵器の甕で、内面は青海波、外面は格子のタタキがみられる。3はSD 33から出土した青磁の碗である。4はSD 37から出土した越州窯系青磁の皿である。胎土に黒色粒子を含み、施釉前に化粧掛けしていること、さらに全体的に釉の発色がよくないことから量産品であるⅡ類に含まれる。また、底部は回転糸切りしている。5はSD 176から出土した。土師器の把手で、外面はナデで成形している。6はSP 30から出土した土錘である。7はSP 32から出土した。不明の土器で、内面にミガキが見られる。8はSP 101から出土した土師器の坏で、外



第7図 遺物実測図 (1/4)

第1表 遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整・文様		胎土 石材、重量	備考	登録 番号
				口径	底径	器高	外面 (釉)	内面 (胎土)	外面 (凸面)	内面 (凹面)			
				(長)	(幅)	(厚)							
1 第7図	SD25	黒色土器 B類	壺	—	(8.3)	(4.6)	黄灰	暗灰黄	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	ミガキ	精良	内面発色せず	201910 000001
2 第7図	SD25	須恵器	甕	—	—	(9.4)	灰	灰	タタキ	タタキ	1~3mm程度の砂粒を 含む		201910 000002
3 第7図	SD33	青磁	碗	—	—	(3.3)	灰オリーブ	灰白	施釉	施釉	精良		201910 000005
4 第7図	SD37	青磁	皿	—	3.8	(1.5)	灰オリーブ	灰黄褐	施釉	施釉	黒色粒子を含む	底部糸切り 越州窯系青磁	201910 000006
5 第7図	SD176	土師器	把手	—	—	4.5	橙	—	ナデ	—	1~3mm程度の 砂粒を含む		201910 000023
6 第7図	SP30	土製品	土錘	(6.2)	1.8	0.4	灰白	灰白	ナデ	—	1mm程度の砂粒を含む	(16.8g)	201910 000003
7 第7図	SP32	土器	不明	—	—	1.2	褐灰	褐灰	ミガキ ナデ	ミガキ	精良		201910 000004
8 第7図	SP101	土師器	坏	(11.6)	—	3.3	黄橙	黄橙	回転ナデ ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	精良		201910 000008
9 第7図	SP111	須恵器	壺	(11.0)	(6.2)	3.0	浅黄	浅黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	1~2mm程度の 砂粒を含む		201910 000010
10 第7図	SP134	黒色土器 A類	壺	—	—	(2.2)	橙	黒褐	ナデ 回転ナデ	ミガキ	精良		201910 000012
11 第7図	SP149	土師器	壺	—	—	(2.5)	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ 回転ナデ	精良		201910 000013
12 第7図	SP151	土製品	支脚	—	—	(5.5)	にぶい黄褐	—	ナデ	—	2mm程度の砂粒を含む		201910 000014
13 第7図	SP152	須恵器	壺	—	—	(4.7)	灰	オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	2mm程度の砂粒を含む		201910 000017
14 第7図	SP152	須恵器	壺	—	—	(5.7)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	2mm程度の砂粒を含む		201910 000016
15 第7図	SP152	須恵器	壺	—	(5.8)	(9.4)	灰	灰	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	2mm程度の砂粒を含む		201910 000015
16 第7図	SP156	土師器	壺	(14.4)	(7.6)	5.3	橙	橙	ナデ 回転ナデ	ナデ	精良		201910 000018
17 第7図	SP158	黒色土器 B類	碗	—	—	(2.9)	黒褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	精良		201910 000019
18 第7図	SP160	須恵器	坏蓋	—	—	(1.7)	灰	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	1mm程度の砂粒を含む		201910 000020
19 第7図	SP162	土師器	把手	—	—	(2.9)	にぶい黄橙	—	ナデ	—	精良	外面に煤付着	201910 000021
20 第7図	SP171	土師器	皿	(10.2)	(7.0)	1.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	精良	底部ヘラ切り+板目	201910 000022
21 第7図	SP184	土師器	坏	(15.2)	(10.8)	3.8	橙	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	精良	底部ヘラ切り	201910 000024
22 第7図	SP188	黒色土器 A類	坏	—	—	(4.0)	浅黄橙	黒	回転ナデ	ミガキ	精良		201910 000025
23 第7図	SP193	土師器	皿	13.2	8.6	2.2	黄橙	黄橙	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	精良	底部ヘラ切り	201910 000026
24 第7図	SP196	土師器	高坏	—	—	(5.0)	橙	灰黄褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	精良		201910 000027
25 第7図	SP197	土師器	壺	—	—	(2.6)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	精良		201910 000028
26 第7図	SP197	石製品	石錘	12.0	5.5	1.7	灰	—	—	—	片岩、152g		201910 000029

() は復元値・現存値を示す

面下部に手持ちヘラケズリが見られる。9はS P 111 から出土した須恵器の坏で、底部は回転ヘラ切りしている。10はS P 134 から出土した黒色土器A類の坏である。内面はミガキが施されているが摩耗により不明瞭である。11は土師器の坏でS P 149 から出土した。12はS P 151 から出土した支脚である。13～15はS P 152 から出土した須恵器の壺である。14・15は肩部にタタキの痕跡が残っており、タタキ後に回転ナデで仕上げたとみられる。13～15は同一個体である可能性もある。16はS P 156 から出土した土師器の坏である。高台部分に2ヶ所約2mm程度の穿孔があり、一直線上に並ぶ。外面から内面へ穿孔されている。17は黒色土器B類の坏でS P 158 から出土した。内外面ともにミガキがみられるが、内面のミガキは摩耗により不明瞭である。18はS P 160 から出土した須恵器の坏蓋である。外面を回転ヘラケズリと回転ナデで、内面をナデで調整している。19はS P 162 から出土した土師器の把手で煤が付着している。20はS P 171 から出土した土師器の皿で、底部はヘラ切りと板目がみられる。21はS P 184 から出土した土師器の坏で外面の底部との境は回転ヘラケズリで仕上げている。底部はヘラ切りしている。22はS P 188 から出土した黒色土器A類の坏で口縁部付近は摩耗によりミガキはみられない。23はS P 193 から出土した完形の皿である。外面は回転ナデ、内面は回転ナデとナデがみられ、底部はヘラ切りしている。24はS P 196 から出土した土師器の高坏の脚部である。上部は横方向のナデで、それより下の部分は不定方向のナデで仕上げている。25・26はS P 197 から出土した。25は土師器の坏である。26は石錘とみられる石製品で、上下の端部に抉れた痕跡がある。また、左右の端部は研磨した痕跡がみられる。

IV. 総括

今回の調査地は、これまでの調査地点の中で最も東に位置しており、遺構の広がりや当地まで広がっていることが分かった。

出土した遺物は少なく、細片が多いため、遺構の時期決定には至っていない。時期が分かる遺物から遺跡の時期は7世紀後半から10世紀代と考えられ、これまでの調査で確認された年代幅とほぼ同じくする。集落の中心とみられる南薫西遺跡第6次調査では10世紀前半代まで、第8次調査では9世紀代まで集落が存続するようであるが、今回の調査で10世紀中頃以降に位置付けられる黒色土器B類が出土したことから、10世紀前半以降も存続していたことが分かる。出土遺物の中で注目されるのは、S D 37 出土の越州窯系青磁皿(4)である。量産品であるⅡ類に含まれるが、出土地は筑後国府跡や大園遺跡など官衙やその関連の遺跡に出土に限られる。南薫西遺跡第6・8次調査で出土した墨書土器、緑釉陶器や輸入陶磁器などと同様に、公的施設との関係や節原郷の中心集落としての姿を示唆するものであろう。

ピットは調査区全域でほぼ密集して検出された。S D 25の西側約2.2mには遺構がみられない帯状の空白地がある。また、北から5.2mほどの長さで、S D 25と平行して走るS D 20がある。そのため、この空白地が道路として使用された可能性が指摘できる。ただし、先述した通り、路面や地業による硬化面や波板状圧痕は確認されていない。



第8図 調査区全景（東上空から）



第9図 調査区から南薫小学校(第6次調査地)を望む(南から)



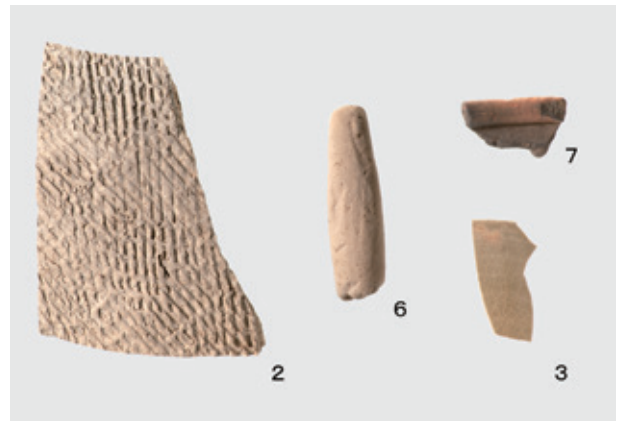
第10図 SD 25 断面（北から）



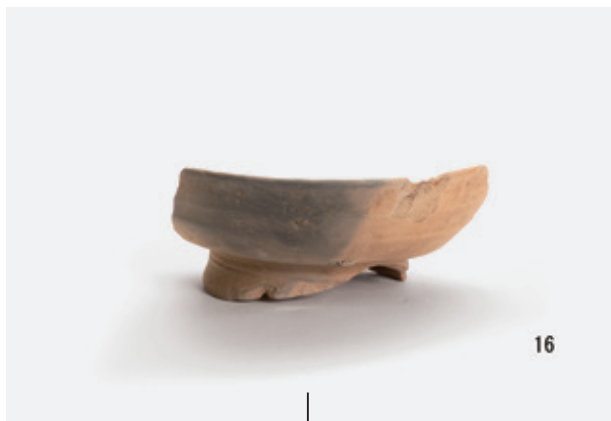
第11図 SD 33 断面（北から）



第12図 調査区北壁断面（南から）



第 13 图 遺物写真①



第 14 图 遺物写真②

報告書抄録

ふりがな	なんくんにしいせき ーだい10じはっくつちょうさほうこくー
書名	南薫西遺跡 ー第10次発掘調査報告ー
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第425集
編著者名	長谷川 桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9714 E-mail:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2021(令和3)年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なんくんにしいせき 南薫西遺跡 だいじちようさ 第10次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 なんくんにしまちあざおんだ 南薫西町字祇園田 1939番1、1940番4、 1940番8、1943番4、 1945番1、1946番3	40203	ー	33° 19' 7"	130° 21' 27"	20191001 ～ 20191220	419 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南薫西遺跡 第10次調査	集落	古代	溝 ピット	7条 多数	土師器、須恵器、黒色土 器A・B類、越州窯系青 磁皿	古代の遺構を確認した。		
要 約								
調査地は、集落の中心と考えられる第6次調査地から北東約100mの場所に位置する。高い密度で検出されたピット群の中で、SD25の西側約2.2mには遺構がみられない帯状の空白地がある。そのため、この空白地は道路遺構の可能性が指摘できる。								
土木工事の届出日		令和元年10月7日		遺物の発見通知日		令和元年12月26日 (1文財第1197号)		

南薰西遺跡

—第10次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第425集

令和3年2月28日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市市民文化部文化財保護課

印刷 赤穂印刷株式会社

久留米市中央町1-1